

## 中学校における自主性を伸ばす教育方法の開発(2) —自主性に関連する個人の学業成績並びに諸条件の考察—

沖 裕貴<sup>\*1</sup>, 井上 史子<sup>\*2</sup>, 林 徳治<sup>\*3</sup>

### <概要>

中学校自主性尺度(井上, 沖, 林, 2005)を用い, 山口市内のK中学校において各生徒の自主性得点を算出した。併せて自主性得点を外的基準に, 各生徒の学業成績並びに指導要録に記載される基本的な生活習慣の評価や, 性別・長子・三世代家族・生徒会活動, 係活動の記録をアイテムとして数量化I類による分析を行った。

その結果, 学業成績の中では, 美術や音楽に関してカテゴリー数量の範囲が大きく, それらの成績と自主性得点に正の相関があることが判明したほか, 係活動や生徒会活動の参加有無も範囲が大きく, 関連があることが判明した。また, 長子か否かでは, 長子の方が自主性が高く, 三世代家族では逆に自主性が低くなる傾向も見られた。

今回得られた知見は, 自主性に関するこれまでの教師の暗黙知を明示化し, 自主性育成のための教育方法開発に一定の基礎資料を与えるものとする。

### <キーワード>

自主性, 中学校, 情意的教育目標, 学業成績

### 1. はじめに

初等・中等教育では, 各教科とも, 学習者の「知識・理解」や「技能・表現」に関する評価については一定の経験と技術の蓄積がある。しかし, 学習指導要領(1998年)で新しい学力観として示された「関心・意欲・態度」の情意的な学力の評価については, 未だ授業を担当する教員の主観に頼っているのが現状である。特に, 各教科や道徳, 特別活動, 総合的な学習の時間での学習や活動を通して学校全体で実現すべき学校教育目標については, 多くの中学校で「自主性の育成」が取り上げられているにも関わらず, 未だその達成度を客観的に検証する有効な方法は開発されていない。

各教科や総合的な学習の時間等において, 個々の学習者の情意的な学力形成や学習の過程を質的に評価する方法論としては, 近年, ポートフォリオ評価やルーブリック評価が注目されている。しかし, これらの評価方法は, 学校教育全体の総合的な成果としての学校教育目標の達成度を検証する手段としては活用しに

くい部分も見受けられる。

そこで筆者らは「自主性評価尺度」(井上, 沖, 林, 2005)<sup>[1]</sup>を開発し, 学校教育目標に「自主性の育成」が謳われている中学校においてその達成度を客観的に測定すると同時に, 自主性育成のためのカリキュラムや取組, 環境, 教育方法を比較することによって, 自主性育成に有効な教育方法を抽出する一連の研究(「中学校における自主性を伸ばす教育方法の開発(1)~(4)」)を続けてきた。

本稿は, 山口市内のK中学校において自主性得点を算出し, その得点と, 各生徒の学業成績並びに指導要録に記載される基本的な生活習慣の評価や, 性別・長子・三世代家族・生徒会活動, 係活動の記録との間に数量化I類による分析を行うことによって, 自主性育成のための教育方法開発のための基礎資料を提供することをねらいとする。

### 2. 調査並びに分析方法

#### (1) 調査対象

学校教育目標に「自主性の育成」を位置づ

\*1 OKI, Hirotaka : 立命館大学 大学教育開発・支援センター E-mail= oki@fc.ritsumei.ac.jp

\*2 INOUE, Fumiko : 山口市立川西中学校 E-mail=inoue05@yamaguchi-ygc.ed.jp

\*3 HAYASHI, Tokuji : 山口大学教育学部 E-mail=hayashi9@yamaguchi-u.ac.jp

けている山口市内K中学校の第一学年から第三学年の普通学級の生徒計 274 名（特別支援学級の生徒を除く）。内訳は第一学年 91 名、第二学年 81 名、第三学年 102 名。

#### (2) 時期及び場所

時期は 2006 年 12 月（第三学年）、2006 年 3 月（第一学年及び第二学年）。場所は各クラスの普通教室。

#### (3) 調査方法

担任から本調査が各自の成績に関係せず、また、担任が回答結果の集計に一切関与しない旨の説明が行なわれた後、質問紙を配布し、一斉記入を行い、その場で回収した。

#### (4) 質問内容

本調査で用いられた設問は、性別を問う設問と「自主性尺度」に含まれる項目併せて 21 項目である。設問は、性別を除き、回答を 5 段階評定尺度法で求め、すべて「1. あてはまらない」－「5. あてはまる」の中から択一で選択するものとした。

#### (5) 有効回答数

有効回答数は、欠席などを除き、回収されたもののうち、全項目に記入のなかったもの、および不適格値と見られるものを除いた 228 名分であった。不適格値は、①「3.3.3. . .」などの同じマーキングのもの、②設問 2 と 9、3 と 6、7 と 8、11 と 12、15 と 18 について、回答が「5」－「1」および「1」－「5」となっているなど整合性のないものとした。

#### (6) 分析方法

自主性に関するアンケート調査とは別に、各生徒の学業成績（国語、社会、数学、理科、音楽、美術、保健体育、技術家庭、英語）並びに指導要録に記載される基本的な生活習慣の評価や、長子・三世代家族の別・生徒会活動、係活動の記録を、個人が特定されないよう配慮して調査し、各自の自主性得点に結合した。

さらに、自主性得点及び自主性を構成する各因子を外的基準に、各生徒の学業成績並びに他の条件をアイテムとして数量化 I 類による分析を行った。また、求められたカテゴリ一数量は基準化を行った。

なお、学業成績については、絶対評価が求められるようになって以来、「1」や「2」の評価が極めて少なくなる傾向があったため、「1」、「2」、「3」を『1』に、「4」、「5」を『2』

に再分類し、『1』及び『2』の比率に大きな差がないよう調整した（e.g. 全学年の国語については、「1」が 0 名、「2」が 11 名、「3」が 121 名、「4」が 81 名、「5」が 15 名であり、これらを再分類して『1』が 132 名、『2』が 96 名とした）。

また、基本的な生活習慣の評価については、指導要録に二段階評定で記載されているものを『0』（記載のないもの）及び『1』（特に優れた者として○が記載されているもの）で評価し、性別は男子を『1』、女子を『2』として評価した。さらに一人っ子を除く長子、三世代家族の別、生徒会活動（前後期の生徒会役員や各部委員長）、係活動（その他学校行事などの係）についても、それぞれ該当すれば『1』、該当しなければ『0』で評価した。

### 3. 分析結果

分析の結果、全学年で  $R=.4562$ ,  $R^2=.2081$  であった。学業成績に関して二分類にまとめたため、アイテムの個数が少なくなり、重相関係数並びに決定率は幾分低いものとなったが、自主性得点への影響を読み取るには問題ない程度であると考えられる。

#### (1) カテゴリ一数量及びその範囲

全学年（228 名）における各アイテムとそのカテゴリ一数量、該当する度数並びにその範囲は以下の通り（表 1）である。

表 1 「全学年におけるカテゴリ一数量と範囲」

アイテム	カテゴリ一数量	度数	範囲
国語[1]	0.47354	132	1.1246
国語[2]	-0.65111	96	
社会[1]	-0.74098	140	1.9198
社会[2]	1.17883	88	
数学[1]	1.06672	147	3.0026
数学[2]	-1.9359	81	
理科[1]	0.41584	152	1.2475
理科[2]	-0.83168	76	
英語[1]	-0.35717	115	0.7207
英語[2]	0.36349	113	
音楽[1]	-1.55085	115	3.1292
音楽[2]	1.5783	113	
美術[1]	-1.16207	160	3.8964
美術[2]	2.73428	68	
保体[1]	-0.1498	181	0.7267
保体[2]	0.57691	47	
技家[1]	-0.50872	117	1.0449
技家[2]	0.53622	111	
性別[1]	0.39465	104	0.7257
性別[2]	-0.331	124	
生活習慣[0]	-0.14587	162	0.5039

生活習慣[1]	0.35805	66	
長子[0]	-0.58855	148	1.6774
長子[1]	1.08883	80	
三世代[0]	0.91289	134	2.2142
三世代[1]	-1.30135	94	
生徒会[0]	-0.25817	209	3.0981
生徒会[1]	2.8399	19	
係活動[0]	-2.06585	108	3.9251
係活動[1]	1.85927	120	
定数項	62.64912		

表 1 より、学業成績のアイテムに関してカテゴリー数量の範囲の大きいものは、美術 (3.8964)、音楽 (3.1292) が挙げられ、逆に範囲の小さいものは英語 (0.7207)、保健体育 (0.7267) が挙げられる。また、その他の条件のアイテムに関しては、係活動 (3.9251)、生徒会活動 (3.0981) についてカテゴリー数量の範囲が大きく、基本的な生活習慣 (0.5039) は小さかった。

また、これらの範囲が大きいアイテムについては、成績が良いほど、あるいは生徒会や係活動に参加した者ほど自主性が高い傾向が見られ、教師が日常、学校現場で感じている暗黙知を裏付けた結果になったと言えるだろう。

一方、それほど範囲は大きくないが、国語と数学、理科に関しては、それ以外の科目と異なり、成績が良い者ほど自主性が低くなる現象が見られる。これは、第一学年、第二学年、第三学年と個別に見たときにも概ね観測され、これらの教科は自主性以外の能力や適性に依存している可能性があるかもしれない。ただ、この解釈については、さらに多くの学校での検証が必要であると考えられる。

また、一人っ子を除く長子か否かでは長男、長女の方が、三世代家族か否かでは三世代家族より核家族の方がより自主性が高くなった。一概には言えないが、家庭環境により自らが自主的に動くことを期待され、かつ動かざるを得ない状況に比較的長く置かれている者の自主性得点が高じている可能性があると言える。

他方、カテゴリー数量及びその範囲に関して学年別に分析したところ、学業成績について全学年と同様、音楽、美術に大きな範囲が見られたのは第三学年のみで、他の学年は特徴が見られなかった。

その他の条件に関しては、全学年と同様、

どの学年も生徒会活動や係活動の範囲が比較的大きいが、第一学年では係活動よりも三世代家族 (3.4617) の影響が、第三学年では生徒会活動や係活動よりも性別の影響 (5.5882, 女子よりも男子が自主性が高い) が大きくなっている。

今回の調査分析は、一つの中学校における分析であるため、これらのことから普遍的な傾向を抽出することは難しいが、少なくとも自主性得点に関しては、全体の傾向として音楽、美術の成績との関連と、生徒会や係活動への参加度との関連が疑わしいと言える。

### (2) 自主性得点と各アイテムとの偏相関

全学年で、自主性得点と 5 教科、4 教科、9 教科の評定値の合計との相関係数(ピアソン)を調べると、5 教科計に対しては.229\*\*, 4 教科計に対しては.298\*\*, 9 教科計に対しては.272\*\*となった。それほど強い相関ではないが、自主性が高いほど成績も良くなる傾向が見られる。

また、各アイテムから自主性得点への純粋な影響度は偏相関係数で見ることができる。

全学年で見た場合、5%以下の有意水準で自主性得点と最も大きな偏相関を持つアイテムは係活動で.223\*\*, 次いで美術が.175\*, 音楽が.159\*となっている。

一方、人数が少なくなり、調査学年特有のバイアスが入ることを承知の上で学年別に眺めると、自主性得点と有意な偏相関を持つアイテムは、第一学年では技術家庭 (.218\*) と三世代 (-.213\*)、第二学年では係活動 (.320\*) と数学 (-.240\*)、第三学年では音楽 (.269\*) が最も高く、次いで係活動 (.253\*)、美術 (.230\*)、性別 (-.225\*) の順となった。

これらの偏相関が高い学業成績やその他の条件は(1)カテゴリー数量と範囲で見た学年別傾向とほぼ一致するものであるが、その影響度はそれほど大きなものではないことが分かる。

### (3) 各因子別の傾向

自主性尺度では、因子として 6 つの因子を規定し、それぞれ「自己統制」、「独創性」、「自己主張」、「独立性」、「判断力」、「自発性」と名付けている。各因子を外的基準にし、学業成績とその他の条件をアイテムとして数

量化I類を行った結果、範囲が1を超えたアイテムは以下の通りである(表2)。ただし、一校における分析である上に、それぞれの重相関係数( $R^2$ )並びに決定率(R)は十分に高いとは言い難いため、一般化することは困難であると考えられる。

表2「各因子内での1を超える範囲を持つアイテム」

因子	$R^2$	アイテム	範囲(>1)
自己統制	.1488	音楽	1.7066
		技家	1.2172
		生活習慣	1.1678
独創性	.1011	なし	
自己主張	.1334	美術	1.5632
独立性	.0556	なし	
判断力	.1227	なし	
自発性	.2077	生徒会	2.2327
		係活動	1.7614

表2より、自主性得点のうち、「自己統制」の因子得点には「音楽」、「技術家庭」、「生活習慣」のアイテムが比較的大きな影響を及ぼし、「自己主張」の因子得点には「美術」のアイテムが、「自発性」の因子得点には「生徒会活動」や「係活動」のアイテムが比較的大きな影響を与えていることが分かる。それぞれのアイテムのカテゴリー数量は、成績や生活習慣が良いほど、あるいは生徒会活動や係活動に参加している者ほど、対応する因子の得点が高くなっており、これらの教科や条件が、自主性得点の対応する因子と一定関連する可能性が読み取れる。特に生徒会活動や係活動と自発性の関連や、生活習慣と自己統制の関連は、因子の命名とも絡めて一定うなずけるものがあると言えよう。

#### 4. まとめ

これまで、教師の主観でしか評価されてこなかった自主性が、自主性尺度によって客観的に評価されることが可能となった。評価尺度が確立することは、それを育成する方法論の開発が可能になることを意味する。

筆者らは、学校教育目標に多用される「自主性の育成」を確認・検証するため、自主性尺度を用いて、いくつかの中学校で実証研究を進めている。

一方、荻谷らは、子どもの学力と父親の学歴、職業、あるいは地域環境や通塾率などの

間に一定の関連性があることを指摘している<sup>[2]</sup>。今回の調査分析は、自主性を育成する方法論の開発の前に、自主性に対する学業成績や家庭環境、生徒会活動への参加度などの、個人の特性や環境条件の影響を事前に明らかにしておくことがねらいであった。

その結果、自主性は学業成績とやや相関があることが分かったが、昨今注目されている基本的な生活習慣とは余り関連性がないことが分かった。

また、自主性には、音楽や美術などの実技系教科と関連があることが判明したほか、生徒会活動や係活動なども影響があることが示唆された。さらに、三世代家族や長子以外の者についても自主性が低くなる傾向が見られた。これは、俗に言う「おじいちゃん子、おばあちゃん子」や「甘えん坊の弟、妹」という教師や世間の暗黙知が一定追認された結果と言えるだろう。

ただ、今回の分析は、自主性育成を標榜する一つの中学校における調査に基づいているため、その学校や学年に特有の傾向が示された可能性も払拭できない。さらに、重相関係数や決定率も十分に高くないので、普遍的な傾向を把握できたとは言い難い面がある。また、生徒が発揮する学校での自主性には、学力に関して荻谷らの指摘する通り、通塾・習い事の有無や両親の学歴、職業、地域性などが影響を及ぼしている可能性も否定できない。これらの事項については、個人情報に絡んで入手困難なものが多く、今回の調査では割愛をせざるを得なかった。今後は、それらの手続きを適正に行い、ある程度の規模の調査を行うことによって、自主性に影響する個人の特性や環境条件を特定し、それらを勘案した自主性育成のための教育方法の開発につなげたいと考える。

#### [参考文献]

- [1]井上史子、沖裕貴、林徳治：「中学校における自主性尺度項目作成の試み」、学習情報研究、通巻182号、pp.37-40、2005
- [2]荻谷剛彦・志水宏吉編：「学力の社会学—調査が示す学力の変化と学習の課題—」、岩波書店、2004